

## 彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻七の本文の位置づけ

はじめに

中根 千絵

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた<sup>(1)</sup>。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。卷一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本A B C、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた<sup>(2)</sup>。卷二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせい<sup>(3)</sup>か、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。卷三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見ることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のように、中間的

な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、卷ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたいとした。<sup>(4)</sup> 卷四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、卷四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならないこととなった。<sup>(5)</sup> 卷五の場合は、内閣文庫本Bとの一致度は他の流布本と同じ程度である。卷五では、卷二と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。但し、卷五では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、天竺という国名については、古本系諸本に依っており、これは卷四と同じである。<sup>(6)</sup> 卷六については、卷三と同様の結果が得られた。<sup>(7)</sup> 卷七についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』卷七の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

### 彦根城博物館所蔵『今昔物語』卷七の本文異同

#### 凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)

★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本（鈴鹿本（京大本））【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたりと考えられることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】  
北―東北大本 野―野村本 以上古本 甲―東大本甲 乙―東大本乙 A―内閣文庫本 A B―内閣文庫本  
B C―内閣文庫本 C 以上流布本 鈴鹿本（京大本）を除く諸本―諸彦―彦根城博物館所蔵本  
大―旧日本古典文学大系

### 卷七目録

一一一 唐高宗代書生書寫大 野 A B C

般若経語第二（第二）

豫洲神間般若（第三） A B C（Bは母イと朱補、Cの洲は州）

忌二字（第二十） 甲北野 B（忌に甲は忘、Bは忘イと朱傍）

菫産（第二六） B

第卅一（第四一） 北野 B

### 卷七第一話

一一二 八 嘉壽殿

底甲北野

8 行キ

A B C

12 誦持シ讀持シ讀誦シ

A B C (Bは讀持シに朱括弧 イと朱傍)

16 過

諸大 「過」は「遇」の通字。

一二三 3 多シテ今

B

卷七第二話

一二三 9 城内ノ

諸

10 我コレヲ聞クニ

B 「我コレヲ聞クニ」 A C (Aは聞の下にクと補入) 「我レヲ聞クニ」底甲北野大(北はレの上にコと補入)

「我、此レヲ」の「此」が書写の際脱落したものであろうか。このままでは意通じがたい。」

13 聞テ

★ 「聞テ」諸大 「聞テ」底

14 不悟

A B C

15 問ヒ出テ

A B (Bは問ヒに朱圈点を附す)

一二四 1 汝ヲ速ニ

A B C

4 涕悲ム

A C (Cは涕に啼カと朱傍)

5 國王ノ作ニ依テ

A B C

5 一経ヲ

A B C

卷七第三話

一二四 11 嫌ハムカ故ニ

A B C (C 傍訓キラ、B のムはン)

11 行ノ時ニ

A B C

12 過ヌ

B C

14 給ル也

A B C

一二五 3 不詳ノ事ヲ

野 B (B は祥イと朱傍)

7 歎テ宣ハク

北野 B (甲は破損のため不明)

9 寫シ奉ル

A B C

卷七第四話

一二六 2 廿歳ニ

諸 (諸は廿)

2 諳ニ誦ミ

甲北野 A 「諳ニ誦シ」 B 「諳ニ誦」 C (誦傍訓ヨミ) 「諳ニ誦ス」底大

2 不思シ

A B C (B は朱圈点を附す)

5 其ノ時

B

5 一人沙門

A B C

8 諳思ユル

B (ユルは変 ヌルイと朱傍)

8 雲音佛

諸

10 依ル也ケリ

A B C (B はトイと朱補)

卷七第五話

一二六 15 願テ

A B C

一二七二 教ユ

A B C 「教ム」底甲北野大（野はムをユと朱訂）

「ユをムの誤写に基づくと考えることが許されるならば、相互に傍証となりえよう。或は、「書写セヨト教ユ」

という表現と「書写セシム」という表現とが混淆したものであろうか。何れにしても解しがたい。「教」は或は「敦」の譌ではないかとも思われる。」

4 惣シテ

諸

5 大般若経ヲ

A B C 「我レ般若経ヲ」底大「□大般若経ヲ」甲北野

5 自然ノシナムト

B（ノの下に此処三字ホト空シイと朱注）

7 船ニ乗テ

野

7 至ル力ヲ

諸（野は略体の事（傍訓コト）を朱傍）

11 云フヘシ

諸

卷七第六話

一二八三 襄洲ノ人也

底甲北野

6 人有テハ

A B C

7 心ヲ慰メテ

底甲北 A B 大（破損のため、ヲはソの如く見ゆ）「心ヲ慰ステ」野「心ヲ慰テ」C

8 天竺ノ人

諸「五天竺ノ人」底大

9 必ス

A B C は欠

16 讀誦シ

A B C は欠

卷七第七話

一二九 6 洲

底大

「底本に州名を具さないことは、本集成立当時からのことであろう。かような場合、一字分空白することもあるが、ここは別に左様な事実はない。原典には「昔有」で直ちに本文が始まる。」

13 熟セル故ニ

A B C

13 離ル、故ヲ

A B C

一三〇 1 所ニ

A B C

2 可知トナム

A B C (Bのムはン) 「可知シトナム」甲北野 「可知シトム」底大(ムの上 かな半分ほど空白)

卷七第八話

一三〇 6 震旦ノ洲ノ

諸大(洲の上 底甲は約半字分空白、北は脱字、Bは脱文歟と朱注)

10 人

B

13 大善知識也ケル

甲北 A B C 「大善知識也ケリ」底大 「大善識也ケル」野

15 参リキ

A B C

一三一 4 尽タリト

諸(諸は盡)

8 投ケ弃テ

A B

卷七第九話

一三三二 6 書寫シテ 底甲北野

7 法蔵ヲ見 A B C

11 聞テ 底

11 云ク所ニ A B C (Bはクにクイと朱傍)

14 命終ル時 A B C

卷七第十話

一三三三 5 房擔ノ上ニ A B C

7 死ヌ 底甲北

8 滯悲テ A B

9 来テ A B C

10 聖人養育ヲ 諸

12 生ル亘ヲ可得シ B (Bは事)

12 約二字分欠方ニ 諸(甲北野Bの空格は約二字分、A C三字分、Bは本ノマ、Cは此間カケタリと朱注)

「原典および類話にも方角を示す語は見えない。本集の編者は其れを将来何かにより補充すべく空格を設けておいたものを、遂に生前その機を得なかつたものであろう。」

14 有ル人ノ家ニ A B

15 人有テ云ク聞テ A B C (Bはクニライと朱傍)

16 二人共ニ B

一三四 1 答ヲ聞キ ★ 「答ヘヲ聞キ」底甲野大「答ヘソ聞テ」北「答ヲ聞テ」A B 「答ヲ聞」C



2 家ノ人

B

5 如此キ也トナム

甲北野 A B

卷七第十二話

一三四 11 其ノ時

B

12 資聖雨明ノ

★ 「資聖雨明ノ」 A B C 「資聖西門ノ」 底甲北野大

一三五 1 无カリケリトナム

底甲北野

卷七第十二話

一三五 6 唐徳宗皇帝ノ

A B C

7 夜ニ生テ

A B C (Bは至イと朱傍)

8 聞クニ

A B

12 讀誦持シケリトナム

A B C (Bのムはン)

卷七第十三話

一三六 10 多ク青雀

A B C

12 法華経ヲ可序キ

甲北野 A B (甲北野 Aは花)

16 語り傳ヘタルトヤ

諸「語り傳ヘタルトヤ」 底甲大

卷七第十四話

一三七五 唇ニ似タリ

甲北野 B 「唇ノ似タリ」底大「唇ニ似タリ」A C

「現在、普通にクチビルと訓ずる「唇」は、もと「動」もしくは「驚」の意の別字。底本の「ノ」は普通は助詞「ニ」を用いる。或は始め「唇ノ如シ」といわんとして後に途中で主体の表現意図が「唇ニ似タリ」と変移した、その推移を如実に示すものか。」

7 尋子給フニ

A B C (A B C は子がネ)

9 夏ヲ得ヲ得タリ

B (B は得ヲに朱括弧 イ・リにルイと朱傍 B は事)

13 右ノ箱ヲ

A B C (B は右イと朱傍)

卷七第十五話

一三八五 娶ス

野 B C

6 呪レテ

底甲北野

9 讀誦ス

A B C

12 音ヲ聞テ

諸

16 本ノ栖ノ寺ヲ

底甲北野

一三九四 讀誦セルニ

A B C

卷七第十六話

14 王道

諸

一三九六 見ル程ニ

諸 (底 程みせけち)

一四〇三 云ヒケリ

A C

5 香ヲ焼テ

A B C

卷七第十七話

一四〇14 堂内ニ

A B C

一四一5 石姥巖ニ

A B (Bは石姥イと朱傍)

7 解テ放テ

C

10 永興色ニシテ

A B C (Bは重書して邑とす)

卷七第十八話

一四一16 尼有リ

A B C

一四二2 勲語テ

A B C

2 珠ニ

諸 (C本除く) 「文殊」を「文珠」となすが如き、中世における通用であろう。

5 供養ノ後

A B C

12 前ノ如シ

A B C

16 箱ヲ灌テ

A B C

16 香ヲ焼キ

諸

一四三1 祈請

A B C

3 経ノ文ヲ本ノ如ク

底 A B C

卷七第十九話

一四三 10 前二

A B C 「但シ前々」底甲北野大

一四四 2 語ヒ亓

A B C (Bはヒにルイと朱傍、A B Cは事)

4 死(脱)僧

A B C 脱

「死(タル人ノ可見キ有リヤ否ヤ)ト。僧ノ申サク、「前二死タル、二人ノ同學ナリシ」

僧」大

10 不可知ヌ

A B

10 血肉ノミ

B 「血肉ノミニテ」A C 「血肉ニテノミ」底甲北野大

16 思テ返テ

諸

一四五 2 其ノ経ヲ

B

2 宿ス

A B C

5 替テ

諸

6 安置シ奉ルヘシト

甲北野B C

7 神返ニ入給ヒヌレ

A B C (Bは二にリイと朱傍)

8 送り奉リテケル

A B C 「送り奉リテケリ」底甲北野大

9 止亓无限キ神ト

A B C (A B Cは事)

9 申セシモ

諸「申セドモ」底大

9 前二

A B C

## 卷七第二十話

一四五 14 忌二字

北野B (Bは忘イと朱傍)

16 鬻鬻

諸（鬻は雲×建、Cはまま鬻に作る）「鬻鬻」大

一四六 4 女ノ身ニ有リキ

A B C

13 師ノ此ノ事ヲ聞テ

B（師ノのノにナシイと朱傍）

卷七第二十一話

一四七 5 三蜜ノ

乙 B

8 糞噉ル

A B C

9 柿ノ下

A B C

10 堀リ出シテ

甲北野 A B

14 鬼道ヲ

A B C

14 免レテ

諸

卷七第二十二話

一四八 4 豫洲人也

A B C（Cの洲は州）

5 販テ好テ

★「販ヲ好テ」底甲北野大「貶ヲ好テ」A C（Cは貶に耽と頭注）「財ヲ好テ」B

7 病ヲ受テ

A B C

8 至レラムニ

底甲北野

11 願有リキト

底甲北野

12 既ニ

A B C

卷七第二十三話

一四九 4 永微

12 我レカ彼ノ

12 彼レ罪シ

13 此レヲ惜ムソ

15 鋒

甲北野 A (甲北野の微は異体、Aはその変)

B

★ 「彼レ罪重シ」底甲北野大「彼レ罪ミ」A B 「彼罪」C

B (惜は変)

甲北野 A 「鋒」大

「鋒」は「鋒」の異体字、彦甲北野 A は上部に更に一筆増画

A B C

★ 「忍ニ」底甲北野大「忽ニ」A B C

「古本、すべて「忍」に作るが、恐らく「忽」もしくは「急」の異体字の誤りであろう。」

卷七第二十四話

一五〇 16 猕獲

一五一 1 漸ク前ニ

2 猕中ニ

7 何ヲ八座ニ

10 恵明施シテ

11 値解義

15 納メテケル

「猕獲」B 「猕猴」底甲北野 A C (底甲北野の猴は草冠+猴)

A B

「猕中ニ」B

A B C (Bはヲに朱圈点)

A B C (Bはニイと朱補)

A B C (Bの値は変 値イと朱傍 値の上に「三寶感応雖アリ」と朱補)

A B

卷七第二十五話

一五二 6 癩病ノ

13 其ノ時

15 本ノ如ク生ス

一五三 2 愈ス

5 奉洲ノ

5 判史

6 遠ク近ク人ヲ

8 永徹

8 自カラ

8 死ナムト云テ

9 天晴レタリト

10 樹葉ノ

13 洲人

底甲北野ABC (甲北野の癩は変 即ち麻だれ)

B

AB 「本ノ如生ヌ」 C 「本ノ如ク生ヌ」 甲北野 「本ノ如シ生ヌ」 底大

ABC

ABC (Bは奉に朱圈点、Cの洲は州)

甲北AC (判に甲は刺歟、Cは刺イと朱傍)

ABC

AB (彦ABの徹は山+徹)

B

ABC (Bのムはン)

甲北野B 「天晴タリト」 AC 「天晴レタリト」 底大

「晴」は「晴」を誤つたものか。

ABC

ABC (Cは州カと頭注)

卷七第二十六話

一五四 2 智前生

3 魏洲刺史

4 共ナル人ノ

ABC

A

ABC

6 叩ム A C

8 上登テ A B C

9 讀誦シ奉リシ所ノ A B C (C傍訓タテマツ)

10 釵 諸

11 讀誦シ奉リニシモ 諸 (底は初め奉リニシと書き 次にシを二の下に書いてシにニを重書してモとしたか。)

一五五 4 庭ニ B C

4 為ル時 A B

5 置キウキテ于今 ★ 「置テキ于今」底甲北野大 (甲の于は変 于と訂す) 「置キテ于今」 A 「置テ今」

C 「置キウキテ今」 B (キウキテにナシイ キに于イと朱傍)

5 令搜ニ A B C 「令搜ムニ」底甲北野大 (甲はムの下にル歟と朱傍) 「終止形を連体法に用いた例。」

6 家主令知テ A B C (Bはニイと朱補)

10 語り傳へタルトヤ A B C 「傳へタルトヤ」底甲北野大 (甲は傳の上に語歟と朱補)

## 卷七第二十七話

一五六 2 行 A B C

2 懇ニ此ヲ A B

6 蹲踞シテ 諸

9 墓ノ前當テ A B (Bはニイと朱補)



卷七第二十八話

- 11 刺史 底 A C (Cは判カと頭注)
- 11 況裕 A B C (Bは説イと朱傍)
- 14 蓮華ヲハ A B C
- 15 見聞ノ人 A B C
- 15 讚メ貴ヒケリトナム A B (Bのムはン)

一五七 4 多眷属ト

B

- 6 死ナム事ヲ悲フ程

A B 大 (Bのムはン、A B 大は事) 「死ナム事ヲ悲フ程」 底 甲 北野 (悲ヲのヲに甲はム歟と朱傍、北はム、野はフと朱訂) 「死ナム事ヲ悲シフ程」 C

- 6 髮ニ

甲 北野 (甲は髣歟と朱傍)

- 7 此ノ岸ニ

A B

- 8 念シ奉レト

底 B C

- 10 儲ノ

A

- 12 太平

諸

- 12 可至也ト云ト云畢テ

B

- 15 偏ニ

A B C

- 一五八 2 語り傳ヘタルトヤ

諸 「語り」 傳ヘタルトヤ」 底 大 (料紙薄きたための空白)

卷七第二十九話

一五八 6 約三字分欠 代ニ 諸 (A Bの空格は三字分、Bは本ノマ、Cは此間カケタリと朱注)

6 武徳ヲ間 A

6 己洲ノ判史ニ AC (Cの洲は州)

11 既ニ般没シヌル時ニ 底ABC

13 浮ノ間ニ ABC

13 其ノ経箱ヲ B

14 不空シ亘ヲ ABC (ABCは事)

卷七第三十話

一五九 5 震旦ノ 約三字分欠 底甲北野B大 (Bの空格は約三字分 本ノマ、と朱注)

ノ代ニ 「震旦」ノ代ニ AC (Cは此間カケタリと朱傍)

5 馮洲人也 ABC (Cは憑州カと朱傍)

6 暴ニ死ヌ 底甲北

6 山龍カ胸 ABC

8 族ニ BC

9 廳亘甚ク大ナル ★ 「廳事甚ダ大ナル」底甲北野B大「嚴事甚大ナル」AC

10 宛キ満テリ B

11 山龍ヲ 底甲北野ABC (底甲北の山龍は合字か。野はやや離して中間、彦は離している)

11 坐セル ABC

12 此何ナル官ソ ABC (C傍訓コレ)

15 何ナル

A B C

一六〇 4 讀カハ

底甲北野 B

7 只自ラ

A B C

10 喚ヒテ

A C

10 付タル

A B C

13 飛窓ノ中ニ

A B C (C 傍訓ヒソウ)

一六一 2 鑿ニ

底甲野 B (野は変 朱圈点を附す)

2 二ノ人ノ

A B

4 瘦眼レル也

★ 「瘦レ睡レル也ト」 底甲北野大 (北傍訓ツカ) 「瘦眼レル也ト」 A C (C のトは補

入) 「疲眼レル也」 B

8 暑ヲ

諸大 「暑」 は中世における「署」の通字。

13 撃ツ

甲野 A B 大 「撃ツ」 底北 「撃」 C

卷七第三十一話

一六二 10 一人ノ

A B C (B はノにナシイと朱傍)

12 従者仕ヒ

A B C

12 馬ヲ乗ル夏

諸 (破損のため底のフはりの如く見ゆ、諸は事)

一六三 2 有リ

諸 「有カリ」 底大

15 不免畢テ

A B C (B はテに朱圈点)

一六四 3 営ミケリト

A B

一六四 7 約三字分欠 ノ代ニ

諸 (A B C の空格は約三字分、B は本ノマ、C は此間ケツ字と朱注)

9 約二字分欠 行ケルニ

★ □ へ行ケルニ」諸 (A の空格は三字分、B C 二字分、B は本ノマ、C はケツ字と朱注) 「物へ行ケルニ」底大

11 非スヤ

A B C

11 然也ト

B

12 住也ト

A B C

14 諸堂舎

A B C

16 我ハ

諸 (底は破損のためハのカナ不明)

一六五 2 不審シテ

甲北野 A B

2 穴ヨリ臨ケハ

諸 「穴ヨリ □ 臨ケバ」底大 (料紙薄きための空白)

5 僧共

諸 「□ 僧共」底大 (料紙薄きための空白)

5 飲合ヘルニ

諸 「飲 □ 合ヘルニ」底大 (料紙薄きための空白)

6 云ハレ方無シ

★ 「云ハム □ 方無シ」底大 (料紙薄きための空白) 「云ハム方無シ」諸 (A B C のムはン)

10 何故ニ

B (故イと朱傍)

10 指タル

流布本 「指ル」大

13 哀レミヲ

B

13 發シテ

「心ヲ發シテ」大

15 其ノ後玄渚カ夢ニ

B

16 吠ヲ 諸底「吠ヲ」大 「吠」は「吠」の異体字。  
返ト A B

一六六 3 示シケル事也ケリト 甲北野 A C (C以外の示は変、甲は示と朱傍) 「□シケル事也ケリト」 B (示イと朱補) 「示シケリ事也ケリト」底大 「底本は当初「示シケリ」といって、後に「示シケル事也ケリ」と続けんとした、その痕跡を止めているものか。」

卷七第三十二話の後、  
六行と半枚空白

卷七第三十三話  
卷七第四十話まで  
〔脱〕 「第三十三語ヨリ第四十語ニ至ルマデ、  
約六枚百十六行欠」大

卷七第四十一話

一六六 13 其ノ時 甲北野 B

14 令誦 A B C

14 諸ノ人ニ 底甲北野

一六七 1 願クハ各 諸「願クハ□各」底大(料紙薄きたための空白)

2 病無クシテ B

2 死ス 野 A B C

3 其ノ時 B

4 一 字分欠 月ノ

諸（Bの空格は三字分、Bは本ノマ、Cはケツ字と朱注、甲の月は日に作り月と朱訂）

6 花有り義真

野ABC

6 睡ル間

ABC（C傍訓ネフ）

7 折取り

AB

## 卷七第四十二話

一六七 12 李思一

底甲野

14 死ス

野ABC

16 門ノ内ノ

ABC

16 行ニハ

BC（Bは二に朱圈点）

一六八 9 金粟世界

底甲北野「金粟世界」ABC大（Bは不審紙）

「古本・原典、粟を栗に作るは非。」

9 令證ムト為ルニ

ABC

10 還間

AB

11 親キテ

AC

12 死スルニ依テ

AB

15 至一亦

B（至に思イ 亦に死ヌイと朱傍）「思一亦」甲北野AC（北は亦の上に死歟と朱補、

野は亦に死東と朱傍）「思一亦ヌ」

「底本、空格はないが、原典「思一復死」によれば、「死」を脱するものと思われる。」

15 活テ語テ云ク

一六九 2 此レハ

B B

8 不去

A B C

8 遙ニ

A B

9 云畢テ

A B C

卷七第四十三話

一七〇 6 亦四安シテ

B (亦四に亦四支不イと朱傍)

8 滅ス

A B C (C傍訓メツ)

11 見レハ

A B C

12 階リ

A B C (Bは階の下に上イと朱補、C傍訓ミギ)

16 死ナムトス

A B C (Bのムはン)

一七一 2 時

「時ニ(以下缺)」大 諸本すべて欠

「恐らくは原典に「夫人至今尚康、年八十(年)矣」とある如き意味のことを付け加える予定であったものが、そのまま功を終えずに打ち置かれた、その編纂過程を示すものであろう。」

卷七第四十三話の

「時」の後

約十三字と九行空白

卷七第四十四話

一七一 要ヲ

A B C

11 喜テ

A

13 水ニ入テ

A B C

14 河ノ水 約一字分欠

甲北野 A B (A B の空格は約一字分)

凍タリ

一七二 1 更ニ寒キ氣色

野 A B C

3 或時ニハ

底甲北野

6 咲フ云ク

A B C (B はフにテイと朱傍)

卷七第四十五話

一七三 3 約三字分欠 申テ

B (本ノマ、と朱注) 「 申ノ」 A 「 申シテ」 甲北野 C (C の空格は一字分)

ケツ字アリと朱注) 「 ニ申シテ」 底大 (底は破損の為不明)

★ 「千疋」 A C 「千疋ヲ」 甲北野 「千匹ヲ」 底 B 大 (底の匹は異体)

3 鐵ヲ

A B C

5 遂ケム

底甲北野 B (ムに底はツと傍書、北野は濁点のようなものを附す、B のムはン)

7 并

甲北野 A B (甲北野 A B は 𠄎)

8 造ラサルノ間ニ

B

14 餘ナルヲハ

A B C

14 分テ与フ

A B C



16 此ノ B  
 16 満スル A B C (C傍訓マン)  
 16 死ヌ 底甲北野

卷七第四十六話

一七四 5 其ノ寺 B

7 我レヲ努、 B

11 此レハ 甲北野 B

13 行ク夏 A B (A Bは事)

一七五 1 實見ムト A B C (Bのムはン ニイと朱補)

6 一里 A C

10 百日 A B C

12 昏キ傳ヘタルト  
 ★ 「書キ傳ヘタルトナム」底大「書キ傳ヘタルト」 B 「書傳ヘタルト」 A C 「昏キ

傳ヘタルトナム」甲北野（野はタの下にルと朱補）

卷七第四十七話

一七六 3 震旦ノ 約三字分欠 代ニ諸 (A B Cの空格は三字分、Bは本ノマ、Cは此間カケタリと朱注)

7 重ク歩テ 諸「重リ歩テ」底大

底本、重の下のかな、字体不明。

7 北向ニ立ヲ ★ 「北向ニ立リ」底甲北野大「北向ニ立テ」A B C

8 古キ衣服ヲ

諸

16 此等ヲ師弁見レハ

A B C

一七七 3 灌テ云ク

A B C

4 清カラム時ニ

C

5 道教フ

A B C

7 目ヲ開テ

A B C

8 起ムトスル

B (ルの下にトイと朱補)

10 昼一夜ヲ

A B C (Bは不審紙、A B Cは晝)

12 有ル衣

A B C

14 猪ノ完ヲ

諸

16 咄テ

A B C (C傍訓ハイ)

一七八 1 驚キ如レテ

★ 「驚キ恐レテ」底甲北野大「驚キ如シテ」A B C (Bは如シに朱括弧 イと朱傍、

2 強肉食ヲ

Cはキにクカと朱傍)

3 其後約

A B C

四  
字分欠

A B C (Cの空格は二字分、Bは本ノマヽ、Cはカケタリと朱注)

五  
六年ヲ

A B C

4 死スルニ

A B C

6 難有カラムト

★ 「難有カラム」底甲北野大「難有カレント」A B C

7 思ハヌ

A C

卷七第四十八話

一七八 11 鄭縣ニ

A B C

14 脂ヲ以テ

A B C

16 法義カ為ニ

甲北野

16 令説知テ

A B C

16 人死スレハ

A B C

一七九 4 埋ツ木ヲ以テ

A C

5 家ニ皈ル

A B C

5 審メ問ニ

B (Bはシテ)

5 活ル由ヲ

A B C (C傍訓イキ)

7 二ノ有

★ 「二ノ人有テ」底甲北野大「二ノ人有」A C 「二ノ者」B (者に人アリイと朱傍)

10 久ク有一 字分欠

A

12 青シ腫タリ

A C (Cはシにクカと朱傍)

13 録夏署シ

★ 「録セヨ録書ノ署シ」底甲北野 (署に野朱傍訓シルシ) 「録事ノ暑シ」A B C 大

14 主典ヲ召テ

A B C

14 業ノ薄

A C (C傍訓ゴウ・ウス)

15 一床盈テリ

A B C (Bはニイと朱傍)

15 法義カ向テ

A B C (カにBはニイ、Cはニカと朱傍)

一八〇 1 過杖八十ノルヘシ

諸(北はノに加筆してナとす、野は過杖に朱圈点 ノにナ東と朱傍、Bはナイと朱傍)

4 案ノ上亦

A B C

- 6 主典ヲ  
A C (Cはヲにノカと朱傍)
- 9 向畢メリ  
A B (Bは向に本ノマ、メにヌイと朱傍)
- 16 此ノ印シテ  
B
- 一八一 2 不入 約三字分欠 者  
A B C (Cの空白部は一字分、Bは本ノマ、Cはカケと朱注) 「不入ス□者」甲北  
野「不入ズ使者」底大
- 3 推フニ  
古本「推ス」流布本
- 3 遂活ヌ  
B (ニイと朱補)
- 4 来レル也ト語ル  
A B C

### おわりに

『今昔物語』巻七の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは流布本系諸本(内閣文庫本A B C)である。また、これまでの巻では、内閣文庫本Bの表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式と同じ傾向にあった。巻七の場合も文字数の空白が内閣文庫本Bとほぼ一致し、さらに、流布本系の表記とは一致せず古本系の表記のみに一致する場合においても内閣文庫本Bとは一致するという結果が得られた。

巻七では、巻二、巻五と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。但し、巻七では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、「嘉壽殿」「襄洲ノ人也」「金栗世界」といった場所の名については、古本系諸本に依っており、これは巻四と同じである。

これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻七においても若干、その傾向がみえる。一七八一「驚キ如シテ」は、古本系諸本の表現「驚キ恐レテ」（底甲北野）と流布本系諸本の表現「驚キ如シテ」（ABC）が混じり合った表現であり、また、一七八六「難有カラムト」は古本系諸本の表現「難有カラム」（底甲北野）と流布本系諸本の表現「難有カラント」（ABC）が混じり合った表現である。ここからは、古本系の諸本と流布本系の諸本の表記の両方を受容した様子が垣間見える。ことに前者は校訂をするつもりであれば、訂すべき箇所であると考えられるが、そのまま混然とした表記を用いている。巻五の分析において「古本系と流布本系の両書が手元にある、古本系に依りつつ、誤脱などがあると判断した場合は流布本系によった、あるいは、古本系に近い東大本乙のような流布本をひき写したかのいずれかであろう。」（9）と述べたが、その表記の選択の在り様は依然として不可解なままである。しかしながら、それは古本系が流布本系へと変化していく動態を示してくれるものとも考えられる。今後、古本の表記や字句との関連を目配りしつつ、その位置づけを考えていくこととしたい。

#### 注

- (1) 中根「未紹介本『今昔物語』（彦根博物館所蔵）についての一考察」（『愛知県立大学説林』53号 二〇〇五年三月）
- (2) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』54号 二〇〇六年三月）
- (3) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』55号 二〇〇七年三月）
- (4) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』56号 二〇〇八年三月）
- (5) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ」（『愛知県立大学文学部論集』57号 二〇〇九年三月）
- (6) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文の位置づけ」（『愛知県立大学日本文化学部論集』1号 二〇一〇年三月）
- (7) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文の位置づけ」（『愛知県立大学日本文化学部論集』2号 二〇一一年三月）
- (8) (1)に同じ。

(9) (6)に同じ。

本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集二』山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄 岩波書店 一九六〇年  
によるものである。